

サビエル生誕五百年

# 巡礼の道

19

藤屋侃士  
(下松市幸ヶ丘)



## 吉田松陰

「西洋の良寛」として、教会関係者だけでなく、広く一般の人からも尊敬されたピリオン神父は、サビエルの住居跡を見つけ出し、そこに記念碑建立の事業を始めるなど、近代日本キリスト教史に残した足跡は大きい。

そのピリオン神父が吉田松陰と関係があったことはほとんど知られていない。  
(ヨーロッパに伝えられていた松陰渡航未遂事件)

## ピリオン神父の数々の伝記



鎖国政策が続く中、アメリカの軍艦で渡航しようとした吉田松陰の事件は、実はヨーロッパにも報じられていたのである。

たのである。

ピリオン神父十一歳の時、郷土フランスのリヨンで新聞に報じられたこのニュースを読んだ神父のお父さんは「アメリカ軍人の石頭」と怒ったという。そこには吉田松陰という名前はなかったが、日本の勇敢な青年の懇願をはねつけた嘆かわしい事件として報じられていた。

ピリオン神父が明治元年に来日し、萩の教会で司教するようになったのは明治二十八年のことである。そこで初めて十一歳の時、フランスの新聞で知った渡航事件の主人公が吉田松陰であり、そのゆかりの地に自分が派遣されたことに感動する。

そして萩で三十年間布教に努め、大正十年に萩を離れることが決まると、松陰神社を訪ね、松陰の愛国心に感激し、それが自分が日本に来たいと思った動機の一つであると話し

た。

その話を聞いた高田社司は、余りに大切な話なので文章にしてほしいと願い、ピリオン神父はその一部始終をフランス語で書き、松陰神社に届けた。  
(忘れられていた

貴重な史実)

私が長く勤めた山口放送本社前庭に松下村塾の模築がある。教育者であった初代社長の野村幸祐氏が吉田松陰に心酔して建てたものである。

私はこの模築を見るたびに、ピリオン神父の松陰神社への手紙の件を思い出した。このエピソードに関する資料を整理し、後世に伝える価値があるものと考え、松陰神社などを訪ねたが、どこにもフランス語の原本は見つからなかった。しかし、四件の記述を見つけた。

(一)大正十四年十一月二十二日発行の雑誌

「渾沌」に竹中利一

訳で手紙の全文がある。

(二)昭和十一年に岩波書店から

松陰全集の関係書類の中に

ある。(昭和十五年の普及版ではカットされている)

(三)昭和四十二年に再版された「ピリオン神父」という本の中にも記述されている。(ただし初版にはなく、思い出話として追加された)

(四)ピリオン神父から洗礼を受けた山崎忠雄著偉大なるピリオン神父の中にもある。これらからラジオ番組が、記述だけのものを

山口放送前庭の松下村塾の模築



音声表現することは難しくあきらめた。

そもそもイエス・キリストと吉田松陰は時の権力者によって三代の若さで処刑されたが、ともに弟子たちによって、その志がなす遂げられたという共通性もある。

今回の巡礼記に記すのは、この史実を大切にしたい思いからなの。は言うまでもない。(元山口放送取締役ラジオ局長)